



発行日：令和3年10月

編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

◆第47回海部会WGを開催しました！

8月4日（水）、第47回海部会WGを、新型コロナウイルス予防対策を徹底した上で開催しました。今回は、東幡豆海岸の現地視察を行いました。話し合いでは、一色干潟観察会等の報告と協議、流域治水・置土実験の報告と協議、公開講座・バスツアーなどの報告を行いました。

日時：令和3年8月4日（水） 13:30～17:20

場所：東幡豆海岸・東幡豆漁協事務所

参加人数：23名（内オンライン参加4名） *事務局を含む



◆主な活動内容

1 東幡豆海岸 現地視察

東幡豆海岸を踏査し、砂浜に打ち上げられたアオサやアマモなどの海洋生物、ウミネコなどの鳥類の状況を観察しました。また、漂着ごみの状況を視察しました。



2 話題提供①（矢作川環境技術研究会 野田賢司氏）

矢作川環境技術研究会の野田賢司氏より、海に関する各種活動について報告していただきました。報告の主な内容は以下の通りです。

- ・ 一色干潟観察会：愛知万博以降実施されている一色干潟観察会の平成19年からの活動の様子が報告された。活動では、海岸清掃、生物観察などが実施されている。
- ・ 環境保全活動報告：豊川河口の前芝海岸での海岸清掃、生物調査の活動の状況が報告された。また、魚介類の乱獲の問題、豊川浄化センターの管理運転とアサリなど底生動物の状況などが報告された。

3 話題提供②（事務局）

国土交通省が推進している「矢作川水系流域治水プロジェクト」について、事務局より説明をしました。また、時瀬地区での置土実験における実施状況について、報告しました。

- ・ 矢作川水系流域治水プロジェクト：本プロジェクトでは、事業を「氾濫をできるだけ防ぐ・減らすための対策」「被害対象を減少させるための対策」「被害の軽減、早期復旧・復興のための対策」の3つのカテゴリーに分け、国・県・市町が一体となって流域治水を推進している。
- ・ 時瀬地区置土実験：令和3年に実施した時瀬地区での置土実験について、実験の目的・方法、実施状況、今後の予定等について事務局より説明した。実験では、下流河川環境への影響を確認・把握することを目的に、物理環境調査・生物環境調査を実施している。今後は、徐々に土砂量を増やしながらか時瀬河川敷公園前、他の箇所にて置土実験を実施していく。

4 その他

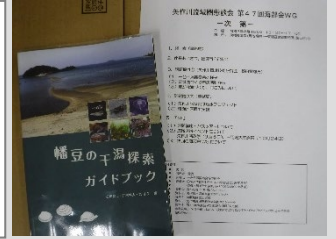
- ・ 7月31日に開催された第1回公開講座「プラスチックが生き物を苦しめている」の状況について、報告されました。また、11月に実施予定のバスツアーについて説明がありました。
- ・ 矢作川感謝祭（9月）と三河湾大感謝祭（10月）について、内容や開催の見通し等の説明がありました。



◆話し合いでの主な意見 (・意見 ▶回答)

●東幡豆 現地視察

- 東幡豆干潟は貴重で、愛知県では唯一のトンボロ干潟である。(石川)
- この干潟にはさまざまな生き物が生息している。アサリの天敵なども生息しているが、多様な生き物がいる。そのような現場を知ることが、一番大事なことである。そのためには、現場に来てもらうのが一番だ。海のことを、さらに知っていただくとありがたい。(石川)
- この干潟周辺で見られる鳥は、ウミネコが多い。海の掃除屋と呼ばれ、流れ着いたものを食べている。浅い場所に食べ物などが流れ着きやすいため、東幡豆周辺には、多くのウミネコが集まっている。浅い場所には、ごみもたまりやすい。(高橋)



●話題提供①

- 釣り人が多くなっており、釣り針がそのまま捨てられる。釣りを楽しむのはよいが、気を付けてほしい。(石川)
- 前芝海岸には漁業権はないのか？ 一色干潟では、外国の人が来て、いろいろなものをたくさん採っている。(高橋)
 - 漁業権はない。豊川の下流ではシジミ採りが盛んになっているが、無法状態となっている。(野田)
 - 六条潟では、三河港の港湾計画で漁業権は全て放棄された。伊勢湾・三河湾では、ハマグリなどの密漁が多い。漁業が営まれなくなれば、必然的に秩序もなくなる。漁業に従事する人がいなくなれば、その場は荒廃する。(鈴木)
- ある程度、捕ってはいけないという規制はあるのか？(青木)
 - 一応、特別採捕許可がない人は捕ってはいけない。例えば、愛知県のアサリ資源の維持・培養という目的から逸脱し、稚貝をどこかに売るとかはできない。(鈴木)
 - 柵を設置し、簡単に入れないようにするなどの対策をとっている。(石川)
- 三重県の桑名周辺で養殖されているハマグリは三河湾にも広がっているのではと考えている。(野田)
 - 元々の原因は桑名の赤須賀地先だと思う。伊勢湾と三河湾は生き物からみると一体である。どこかに再生産が可能な母群が残っていれば、資源の回復は期待できるということだろう。(鈴木)
- 三河湾は栄養状態が低かったのがハマグリが中心だったが、栄養状態が高くなってきたので、アサリに変化した。しかし最近、栄養状態は低くなってきており、アサリにも影響している。漁業者の経済活動を支えるという面で、一定の栄養水準の管理が必要だと思う。(鈴木)

●話題提供②

◆矢作川水系流域治水プロジェクト

- 豊田の街は、矢作ダムが竣工し、ある程度治水が可能となったことにより、成り立っているといえる。(高橋)
- 流域治水というと、いかにも新しい手法のように思われるが、霞堤などにみられるように伝統の技でもある。(井上)
- 都市の中に水を溜めるような大規模な整備は難しいが、さまざまな工夫により、都市の中での貯留効果について市町と協力して進めていきたい。(相川)
- 川だけではなく、上流の山の浸透性、治水能力についても考慮していきたい。(井上)
- メニューを具体化しづらいと思うが、「被害対象を減少させるための対策」が重要だと思う。(青木)

◆時瀬地区置土実験

- 置土により矢作古川の流量が減ってしまうようなことは注意していただきたい。(青山)
 - 調査に合わせてシミュレーションを行っている。異常堆積した場合は、掘削除去などの対策を行うことから、流量が減ることはないと考えている。(事務局)
- 置土した場所の下には、堰やダムがある。流域全体としての土砂管理という点で、矛盾があるかと思う。堰やダムがあるのに、海までの土砂供給は難しい。海まで土砂を直接運ぶほうがよいのではないか。(鈴木)
- 省エネ対策を講じた上で、海まで土砂を運ぶ考え方に切り替えたほうがよいのではないか。(高橋)
 - できるだけ自然の力を借りて土砂を流すことを考えている。運搬する場合、経費が膨大となる。その他、土砂をどこかに仮置きし、海岸を管理している機関に依頼することなども検討している。(事務局)
- 目指すべきは、「流域治水」というより「流域管理」だと思う。川は、治水だけではなく、利水もあり、土砂や栄養塩を、海に持っていくという役割も担っている。(近藤)
- 適正な洪水がないと、土砂は下流に流れない。つまり、土砂はあまり移動しないと思う。(近藤)
- 水田による貯留機能が必要なのは上流であり、下流にあっても意味がない。水田貯留は豊田市街地よりも上流で考えなければいけない。(近藤)
- ダムの底にたまった栄養塩やヘドロは、サイフォンなどで取り出して下流に流す方法があると思う。(高橋)
- 矢作川のはものは矢作川で賄っていく工夫、新しいシステムを考えていくとよい。(高橋)

今後の流域圏懇談会の予定

■第48回海部会WG 日時：令和3年10月12日(火) 14:00~16:30

場所：西尾市役所 5階 53ABC会議室

◆お問合せ◆

矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西1-6 国土交通省豊橋河川事務所 事業対策官 佐藤、専門官 竹下、技官 木村
TEL 0532(48)8107/FAX 0532(48)8129

*矢作川に関する情報は、国土交通省豊橋河川事務所調査課 (cbr-toyo-chousa1@mlit.go.jp) までお送りください。